彙　　報

会長　早田輝洋

平成13年度第1回常任委員会

日　時：平成13年4月28日（土）午後2時～5時

場　所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所セミナー室

出席者：早田輝洋（会長），梶　茂樹（事務局長），大石正幸，久保智之，坂本勉，清水克正，早津恵美子

オブザーバー：吉田和彦（大会運営委員長），中島由美（第122回大会実行委員長），塩原朝子（事務局長補佐）

議題

［報告事項］

（1）第122回大会（一橋大学，6月22日・23日）について

1. 会長の早田輝洋氏から，一橋大学の中島由美氏に，氏を実行委員長として正式に大会開催の依頼があり，中島氏はこれを受諾した．
2. 大会運営委員長の吉田和彦氏から，準備状況およびプログラムの報告があった．発表応募52件のうち採択件数は40である．なお，今回もポスターを作成し，関係者に掲示を依頼することにした．

（2）会長から，規定により，1年半務めた吉田和彦氏に代わり，次期（2001年10月から）の大会運営委員長として，日比谷潤子氏（慶応大学）が指名されたことが報告された．

（3）『言語研究』の出版助成として，平成13年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）から150万円の交付が内定した旨，日本学術振興会から通知があった．

［審議事項］

（1）平成12年度決算報告

平成12年度の決算報告があり，了承された（別表1参照）．

（2）平成13年度予算

平成13年度予算について審議を行い，委員会に提出する具体案を作成した．

（3）今後の大会について以下の点が審議された．

1. 同一の発表者の連続発表を制限すべきかどうかについて論議が行われた.
2. 大会運営委員会にかかる負担が大きいことから委員を増やすべきであるとの提案があり，了承された.
3. シンポジウム及び講演会での講演者が非会員の場合，宿泊費を学会側が負担するべきであるとの提案があり，了承された（現行では謝金と交通費のみ支給）.
4. 第123回大会を九州大学文学部（坂本　勉大会実行委員長）で，11月17日，18日に行うことが了承された.

（4）『言語研究』について

編集委員会からの『言語研究』について以下の提案があり，審議を行った.

1. 編集委員に海外編集委員を加えること.
2. 現在仮運用している英文執筆要項を正文化する.
3. 執筆要項のうち，欧文原稿に対して和文のアブストラクトを要求する部分を変更する（海外からの投稿に対応するため）.
4. 彙報および大会発表要旨を『言語研究』からはずす.

以上，1. および 2. については，常任委員会で了承され，委員会で提案を行うことになったが，3. および 4. については，結論が出ず，継続審議となった.

（5）学会会費の「学生割引」について

学生会員の会費の「学生割引」の導入の是非について議論を行ったが，結論が出ず，継続審議となった.

平成13年度第 1 回委員会

日　時：平成13年 6 月29日（土）午前10時～午後12時30分

場　所：一橋大学佐野書院

出席者：早田輝洋（会長），梶　茂樹（事務局長），池上二良，井出祥子，上野善道，菊地康人，久保智之，郡司隆男，小泉　保，坂原　茂，坂本　勉，坂本比奈子，崎山　理，佐藤昭裕，澤田治美，清水克正，庄垣内正弘，杉戸清樹，田窪行則，田野村忠温，田村すず子，柘植洋一，辻星児，角田太作，津曲敏郎，長嶋善郎，西光義弘，林　　徹，原口庄輔，原田かづ子，樋口康一，日比谷潤子，平野尊識，福井　玲，町田健，松村一登，宮原文夫，村崎恭子，薮　司郎，湯川恭敏，吉田和彦，吉田　豊（以上42名）

委任状：19名

オブザーバー：荻野綱男（会計監査委員），窪薗晴夫（会計監査委員），下宮忠雄（CIPL 担当），塩原朝子（事務局長補佐）

議題

［報告事項］

（1）科学研究費補助金審査委員候補の推薦について

日本学術会議より平成13年度科学研究費補助金審査委員候補の推薦依頼があり，委員による選挙の結果，第一段審査員候補として4名，第二段審査員候補として1名を選出し推薦した．

（2）科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の確定について

平成13年度「学術定期刊行物」への補助金として『言語研究』に150万円の交付が決定した．

（3）平成13年度第1回常任委員会（4月28日）の報告

会長より上記の委員会について報告があった．上記委員会の議題は以下のとおりである．（各項目の詳細は「常任委員会報告」を参照のこと）

（i）平成12年度決算報告，（ii）平成13年度予算案，（iii）第123回大会の開催校，（iv）大会運営委員会委員の増員，（v）大会シンポジウム及び講演会の非会員講演者に対する宿泊費負担，（vi）『言語研究』に関する学会規定変更，（vii）『言語研究』執筆要項の変更，（viii）学生会員の設定．

（viii）については，坂本　勉委員からその趣旨や実施に当たっての問題点などについて発言があり，委員の意見を募りながら議論を続けていく旨説明があった．

（4）委員会・作業部会の活動報告

(A)大会運営委員会（吉田和彦氏）

4月7日に第1回の大会運営委員会を開催し，122回大会のプログラムを決定した．応募52件に対し，採択数は40件であった．常任委員会で大会運営委員の増員が認められたのを受け，新規委員を選考中である．

(B)編集委員会（田窪行則委員長）

- 第119号の編集および発送が遅れたことへの謝罪，および第120号に関しても掲載可能な論文が集まらないため編集が難航していることの報告があった．このため，各委員の積極的な投稿を促すとともに，各委員から会員に投稿を促すよう依頼があった．
- 3月に編集委員会を開き，規約改正，および投稿規定の変更について議論を行った．（審議事項（5）参照）

(C)危機言語小委員会（坂本比奈子委員長）

6月22日に委員会を開催し，上記シンポジウムの件等を議論した．（審議事項（7）参照）．

(D)夏期講座検討小委員会（荻野綱男委員長）

6月22日に小委員会を開催し，本年度の活動方針および2002年度夏期講座の計画が議題となった．現時点では長野県白樺湖畔で200人規模のものが予定されている．実行委員長は三原健一氏である．また，新規実行委員として那須昭夫氏（大阪外国語大学）を加えた．秋の委員会までに日程，場所等の最終決定を行う．

(E)Pacific Rim Institute 小委員会（原口かづ子委員長）

6月25日～8月3日開催の LSA の Linguistics Institute への派遣奨学生選定について

奨学生募集（1月31日締め切り）に12名の応募があった．審査の結果，国外在住者に5万円，国内在住者のうち成績上位者10名に10万円，それ以下のものに5万円を付与することに決定し，3月6日に結果を通知した．（通知後1名の辞退者があった．）

（5） CIPL についての報告

CIPL 連絡担当の下宮忠雄氏から以下の報告があった．5年に1度開催される国際言語学者学会が2002年の7月にメキシコのオアハカで開催予定である．発表申し込みは10月1日が締め切りである．

（6） 学会ホームページ

学会ホームページ作業部会責任者の村松一登氏から，ホームページの周知徹底のため，学会大会プログラムなどにホームページのアドレスを掲載するよう要請があった．

［審議事項］

（1） 平成12年度の決算報告があり，了承された．これは，2001年4月17日，会計監査委員の荻野綱男氏，窪薗晴夫氏により，適正であると認められたものである．（別表1参照）ただし，消耗品の金額が一カ所合わないところがあったが，これはのちに単なる計算ミスであることが判明した．この件については次回委員会で報告することとした．

（2） 平成13年度予算が審議の末決定した．（別表2参照）

（3） 第123回大会について

平成13年11月17日，18日の2日間，九州大学を会場に開催することが提案され，これを了承した．（運営委員長は同大学文学部の坂本　勉氏）

（4） 現在会員数は個人会員約1,920名，団体会員約120名である．近年の会員増加などによる事務量増加を受け，中西印刷へ支払う学会事務委託費

を年間3,989,160円から4,284,000円に増額することが提案され，了承された．

（5）『言語研究』の編集委員に係わる会則変更について

田窪行則編集委員長が上記の変更を提案し，議論の結果，「特別編集委員」に関する規定を第19条第4項として追加することが決定した．これは海外在住の研究者の『言語研究』の編集への参加を容易にすることを目的とするものである．なお，この項目の運用は別記「運用のための申し合せ」によることを委員会で確認した．（会則の変更点の詳細，および運用のための申し合せについては別記3を参照のこと．）

その他『言語研究』に関して，以下の点が報告，審議された．

- 執筆要項のうち，欧文原稿に対して和文のアブストラクトを要求する部分を変更する（海外からの投稿に対応するため）方向で検討中であるとの報告があった．
- 邦文の論文を英文に翻訳し掲載してはどうかという提案に対し，委員長は将来翻訳論文を集め特別号として刊行することを検討中であると回答した．

（6）中国語国際学会大会（IACL-11）に対する後援について

実行委員長岩田　礼氏（愛知県立大学）の要請を受け，上記大会に10万円を後援金として支出することが了承された．（予備費から支出）

（7）危機言語小委員会の活動について

平成12年度委員会で，科学研究費補助金による特定研究（A）「環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究」と日本言語学会が共催でシンポジウムを開催する旨了承されたが，その後，このシンポジウムは日本言語学会後援という形に変更され行われた（6月9日，10日，清泉女子大学で開催）．この件について坂本比奈子委員長が事後承諾を求め了承された．また，同特定領域研究の今秋開催予定のシンポジウムも当学会が後援するということが承認された．

平成13年度第1回「危機言語」小委員会

日　時：2001年6月22日（金）13時47分～17時

場　所：麗澤大学東京研究センター
　　東京都新宿区西新宿8-5-1

出席者：池上二良，池田　巧，梶　茂樹，坂本比奈子，笹間史子，田村すず子，角田太作，津曲敏郎，奈良　毅，林　　徹，稗田　乃，福井　玲，村崎恭子

［審議事項］

（1） 2001年度予算の使途について

- 例年どおり，主として会議費，交通費に当てることで予算案が承認された．

（2） 今後の小委員会の活動について

- シンポジウム，講演会などの共催，後援などについて意見が求められ，今後も特定領域科研をサポートすることには意義があるという見解の一致が得られ，秋の講演会も科研側から要請があれば後援することが決定した．
- なお本件については，6月22日の言語学会委員会において事前承認を得ることができた．

（3） 「危機言語」研究の諸問題を考える会について

- 来年度から小委員会の後で「危機言語」研究の諸問題を考える会を行うことが決定した．第一回目は「調査の倫理問題」をテーマとし，角田委員が担当する．この会は委員会活動の一部として行うものであるが，公開，非公開は，ケース・バイ・ケースとする．

［報告事項］

（1） 特定領域科研「環太平洋の言語」主催公開講演会の後援について

- 当初，「環太平洋の言語」に関する公開講演会を，科研と言語学会の共催で開催するということが委員会承認を得てスタートしたが，今年1月，科研代表の宮岡伯人大阪学院大学教授より，共催では科研が言語学会の下部組織であるとの誤解を招く恐れがあるとの理由で，言語学会後援に変更したい旨の申し入れが委員長にあった．時期的に委員会を開くのが困難であったため，メール会議で小委員会に計り，委員の承認を得て変更が決定した経緯が委員長より報告された．なお，この変更については，言語学会委員会で事後承諾を得るという会長の了解のもとに行われた旨の説明がなされた．

（2） 2001年6月9日，10日の公開講演会について

- 笹間委員から6月9日，10日の公開講演会について報告がなされた．

（3） 2000年度危機言語小委員会費収支報告

- 2000年度予算の収支報告がなされた．また，昨年度までの委員会費150,000円では不足であることが明らかであるため，委員長が事務局に願い出て200,000円の予算がつけられた旨の説明がなされた．

Pacific Rim Institute 検討小委員会最終報告

1. 委員長（原田　かづ子）報告

2001年アメリカ言語学会夏期講座（Pacific Rim Linguistic Institute）が，アメリカ合衆国カリフォルニア州サンタ・バーバラにおいて，本年6月25日より8月3日まで開催された．この夏期講座は，アメリカ言語学会・日本言語学会・韓国言語学会・オーストラリア言語学会・ニュージーランド言語学会・中央研究院語言研究所・中華民国計算語言学学会の共催であり，各学会はその準備段階より貢献のあり方について検討したが，日本言語学会では，以下のような年度毎の検討を経て，講師4名を派遣，大学院生11名（12名中1名辞退）に奨学金を支給した．

・平成9年度：第1回常任委員会において，常任委員会の下に3つの作業部会を設けることを決定した．その1つ国際関係作業部会（井出祥子（座長），田窪行則，長嶋善郎，原田かづ子）における検討事項の1つが Pacific Rim Linguistic Institute（以下「Institute」とする）に対する貢献のあり方であった．この決定は，第1回委員会において報告され承認された．

・平成10年度：第1回常任委員会において，Institute に，日本言語学会として講師派遣や参加者（大学院生）への経済的援助など，積極的な貢献の道を引き続き検討していくことが確認され，第1回委員会に報告された．さらに，第2回常任委員会において，国際関係作業部会から Institute に係る諸問題を集中的に検討するために Pacific Rim Institute 検討小委員会（以下「小委員会」とする）の設置が提案された．この件については，第2回委員会において，次の諸氏が小委員会委員として常任委員会より推薦され承認された．早田輝洋（委員長），角田太作（海外事務担当），田窪行則（国内事務担当），井上和子，井出祥子，原田かづ子

・平成11年度：Institute に対する日本言語学会の貢献のあり方に関して，第1回常任委員会における検討を経て，小委員会委員長（早田輝洋氏）より第1回委員会に以下の報告がされ承認された．

派遣講師については，Institute のテーマ（Diversity of language: Why and how languages differ?）にあわせ，また日本言語学会からの貢献ということを勘案して，(a) 日本語文法の歴史，(b) 現代の日本語文法，(c) 社会言語学・方言研究，(d) アイヌ語ないしは北方言語，の4分野の専門家を派遣することに決定した．

派遣講師の人選については，検討小委員会に一任する．また，同 Institute への参加希望学生に対する奨学金の支給についても，その方法などを検討中である．これを受け，さらに第2回常任委員会での検討を経て，第2回委員会に，4名の

派遣講師の内定したことと，講師に対して学会より往復旅費と滞在費が支給されることが報告され承認された．講師名と講義分野は次の通り．金水敏氏（日本語文法の歴史），田窪行則氏（現代日本語文法），中川裕氏（アイヌ語），ダニエル・ロング氏（社会言語学・方言研究）．また，同 Institute に参加を希望する学生に対する奨学金の主な要領も報告され承認された．

・平成12年度：第1回常任委員会における検討を経て，第1回委員会において，早田委員長が日本言語学会会長に選出されたことに伴う，小委員会委員長交替（原田かづ子委員が委員長となる）が報告され承認された．また，委員長から奨学生募集の方法，日程等の報告がされた．第2回委員会においても，奨学生募集に関する報告がされた．

・平成13年度：第1回委員会において，小委員会委員長（原田かづ子）から奨学生募集および選考過程に関する報告がされた．また，派遣講師への往復旅費・滞在費および奨学生に対する奨学金支給額も以下の通り合わせて報告された．

派遣講師	【Course Titles】
金水　敏（大阪大学大学院）	Historical Change and Harmonization of Japanese Grammar
田窪　行則（京都大学大学院）	Issues in Modern Japanese Syntax
中川　裕（千葉大学）	Structure of Ainu
ダニエル・ロング（東京都立大学）	Japanese Sociolinguistics

LSA Pacific Rim Institute

日本言語学会奨学生	【奨学金支給額】	【備考】
Hartenstein Anne-Marie（神戸大学）	10万円	
武田　知子（University of Oregon）	5万円	辞　退
牧　木綿子（甲南大学）	10万円	
神原由紀子（甲南大学）	5万円	
朝日　祥之（大阪大学）	10万円	
小谷早稚江（京都外国語大学）	5万円	
若松美紀子（一橋大学大学院）	10万円	
片岡喜代子（九州大学大学院）	10万円	
向井　絵美（九州大学大学院）	10万円	
吉村めぐみ（九州大学大学院）	10万円	
成岡　恵子（日本女子大学大学院）	10万円	
山崎　雅嗣（University of Arizona）	5万円	

以下に，派遣講師4名および奨学生（11名中）3名からの Institute 参加報告を記す．学会員のみなさまには，派遣講師は，日本言語学会の研究レベルを体現したすばらしい講義を行い，奨学生はそれぞれ得難い知的刺激を受け有意義な一夏を過ごしたことを読みとって頂けたら幸いである．Instituteに対して日本言語学会がこのような貢献をすることができたのは，ひとえに会員みなさまの熱心なサポートによるものと，最後に感謝の意を込めお礼を申し上げて小委員会の最終報告としたい．

2. 2001年アメリカ言語学会夏期講座派遣講師報告

(1) 金水　敏（大阪大学大学院）

私の講義が成功であったかどうかは，私の感想だけでは決められないことであり，またもう少し時間をかけて分析したいことでもある．しかし，今回の講師派遣は私個人にとっても，また恐らく学会全体にとっても貴重な，得難い経験であり，お引き受けしてよかった，行ってよかったという結論は動かないものと信じる．

とはいえ，アメリカの大学への講師派遣が，学会としても，私個人としても始めての経験であったために，さまざまの未知の要素，不確定の要素が存在し，事前の準備にかずかずの不安を抱えたままの出発となったことも確かであった．すべての事情が明らかになった今であれば，ああしておけばよかった，こうしておけばよかったと思うことも多く，また次もこのような機会が学会として持てるなら，事務局や次回の講師の方々に申し伝えたいことも多々ある．

まず，visa の問題である．事前に UCSB から J-1 visa の取得を求められていたので旅行社を通じてアメリカ総領事館に申請したが，事務局からいただいた書類に問題があるということで visa が下りなかった．その後，私の個人的な事情も重なって，再申請が出発の4日前，総領事館に出向いての直接申請となって，出発に間に合うかどうか，肝を冷やした．結局，再申請では何の問題もなく visa が発行されたので結果として間に合ったが，こんな心配は二度と経験したくないことであった．visa の必要性について，今回は UCSB から俸給を受けるわけではないので，観光目的で visa なしで入国しても問題ないのではないかとの意見も伺ったが，行ってみるとやはり visa は必須であり，J-1 visa なしに入国していたら大変面倒なことになっていたと思う．今後，同じような講師派遣があり得るならば，visa の申請については事務局の万全のバックアップ体制のもとでつつがなく進行するよう期待したい．

さて最も重要なのは，言うまでもなく授業の問題である．英語力の不安ということは常に最大の問題であったが，こればかりは一朝一夕に解決できる問題ではないので，「なるようにしかならない」と腹をくくることにした．しかし，一体，

どのような学生が，何を求めて受講しにくるのか，学部生はいるのか，いるとすればどのくらいか，といった問題は，授業を組み立てる上で必須の情報であり，これ無しに講義の本番を迎えるというのは大変不安なことであった．私の講義に課せられたテーマは「日本語文法の歴史」であったが，専門的な論文を読むことを期待されているのか，あるいは学部生程度のレベルを見据えて，基礎的な通説・学説の整理を中心にすればよいのか，という点がよく分からなかった．

結果として，テーマの特殊性もあり，日本語に不案内な学生は受講しなかった．かなり入れ替わりもあったが，安定して出席したのは20数名といったところで，九割以上が日本人（日本から来た方が在米の方より若干多かった）であり，残りの非日本人もかなりの日本語の力があることが分かった．そこで受講者の許可を得て，英語力の足りない部分は日本語での説明もありということにした（半分くらいは日本語を喋っていたかもしれません）．

授業を始める時点で，日本の歴史概観と資料の説明，古典文法の基礎を半分くらいの日程でやってから，あとの半分で専門的な論文をいくつか読むという予定で出発したが，始めてみると古典文法の基礎に思いの外時間をとられ，結局，論文は読めなかった．このことについては，古典文法に（高校の授業は別として）ほとんど触れたことのない受講者には歓迎されたが，内容的に物足りなかったとする受講者の方もあったことは確かである．どのような授業の組立が良かったのかという点については，未だによく分からない．やはりこれは，「海外における日本語の歴史的研究の教育」自体が新しい試みであり，経験や実績が積み上げられていないという点が一番問題なのであろうと思う．テキストの問題も含めて，今後もっと研究されてよい課題であると考える．

なお，宿舎の費用がかなり高いということを除けば，大学設備の充実，現地スタッフの対応のみごとさ，自然の豊かさ，ダウンタウンの町並みの美しさ等々，申し分のないことばかりであった．学生や研究者とのうれしい出会いもあった．惜しむらくは，自分の授業の準備に追われて，一流の言語学者による講義の数々にほとんど出席できなかったことである．ともあれ，この上もなく貴重な体験をさせていただいたことに対し，学会員の皆様に心からお礼を申し上げる次第である．ありがとうございました．

(2) 田窪行則（京都大学大学院）

LSA 夏期講座での私の担当は Issues in Modern Japanese Syntax であった．週二回110分の講義で6週間おこなわれた．講義にさきだって Reader と呼ばれる講義資料の提出がもとめられ，論文6編からなる100ページ程度の参考論文を前もって提出した．提出にあたってはコピーライトに関わる書類にサインを求められた．人によっては300ページ以上の Reader を使った講師もいる．これは印

刷製本され，学生が購入する．講義ではほかにハンドアウトを用いた．

当初の登録の学生は，単位取得を目的とする学生が15名，聴講のみが６名であった．聴講生は，大体アメリカの大学で教鞭をとっている方が２名，日本の大学で教えている方が４名であった．１回目の講義には，これら正規学生のほかに10数名の聴講者がおり，総員は30名を越していた．これらの聴講者は，毎回入れ替わり，延べ人数では50名を超えたと思われるが，結局，正規学生も何人か脱落し，聴講者はだいたい20名前後で，そのうち５人ほどが１週間程度で入れ替わるという状況であった．不思議なことに Reader はベストセラーで３度すりなおしたが，売り切れたらしい．講義はすべて英語で行われ，講義自体は日本語の知識はさほど必要としない形で行われたが，日本語の例文のかなり複雑な判断が必要とされると感じられたためか，日本語を母語としない聴講者は最初の２回で２，３名にへり，あとは日本語母語話者で，そのなかにはドイツ語や英語との二重言語使用者もいた．

シラバスでは，純統語的アプローチと認知的アプローチの両方が関わる現象を扱うとしたために，聴講者の専門分野は談話，語用論，統語論など多岐にわたり，多少前提とする知識の想定がむずかしかった．結局，統語論的アプローチの方が主となってしまい，談話や認知言語学を専門とする聴講者には不満が残ったものになったようである．

学生は非常にまじめで優秀であり，レポート提出したものはほとんどが優であった．自分としては特に日本で行う講義と違うことをしたつもりはないのだが，私の前任校の学生が何人か聴講しており，彼らによると，私の講義は英語で聞いたほうがわかりやすかったそうである．知らず知らず，資料の準備にしろ，ハンドアウトの記述にしろ，丁寧な説明をこころがけていたらしい．

講義の最後に講義内容と講師の力量に対しての学生の評価がなされた．その結果はまとめられて送付されてきた．おおむね正当な評価であったが，「繰り返しがすくない」「繰り返しが多すぎる」など相矛盾する評価があって面白かった．今回の講義は日本で言えば半期の集中講義というものだが，週２回６週間という形であり，非常に時間の余裕があったため，一部ではあったが，他の講師の講義にも出られ，週末には多少の旅行もできてよかった．

このほかに夏期講座の運営などに関しても勉強になることが多かった．LSA は担当大学での正規の講義となるため，大学の夏期講座の担当事務員が何名か専属であたる．今回の責任者であった Barthmaier 氏はじめ他の事務員の方や学生アルバイトの方もみな非常に優秀で，準備期間中もさまざまな情報を適切に流してくれただけでなく，講義期間中も気さくに我々に声をかけてくれ，講義に関しても生活に関しても大変気持ちよくすごすことができた．また，今回の夏期講座の総責任者である Charles Li 氏も非常に細かい気配りをしていただき感謝して

いる.

今回の講師派遣の目的としては日本言語学会の広報活動もその目的の一つに挙げられていた. 私の講義がその目的のためにどれほどの効果があったのかは不明であるが, 同じような形で参加していた韓国言語学会, オーストラリア言語学会の研究者とは協力関係を続けようということになり, 韓国言語学会からソウル大言語学科の李教授, オーストラリア言語学会からメルボルン大の Austin 教授に『言語研究』の特別編集委員となってもらった.

今回の LSA 派遣は私個人にとっては研究上でも, 教育上でもおおきな成果が得られたと感じている. 今回 LSA で講義するという貴重な機会を与えて下さった日本言語学会に感謝したい. 費用対効果が十分あがるように, これからも研究, 教育, また日本言語学会での活動にこの経験を生かしていきたい.

(3) 中川 裕 (千葉大学)

今回の夏期講座では, Structure of Ainu と題し, アイヌ語の現状, 研究史, 方言, 音韻についての概説を前置きにして, アイヌ語の文法構造におけるいくつかの特徴的な点についての講義を行った. 原則的にすべての例文についてその原音声を聞かせるという方式をとり, その点では好評を得た. 初日は30名近くの受講者で教室が埋まり大変やりにくかったが, 最終的には10数名に落ち着き, 活発な質疑応答を交わしながらアットホームな雰囲気の中で授業を終えることができた. 他の講師の方々も同様なことを書かれると思うが, 事務局には大変有能なスタッフが揃っており, そのおかげで非常に快適な6週間を送ることができた.

英語でアイヌ語の講義を行うのは初めてであるが, そこで改めて痛感したことはアイヌ語学における英語文献の乏しさである. 文法書としては, Kirsten Refsing (1986) *The Ainu Language* 以来 Shibatani Masayoshi (1990) *The Languages of Japan* および Tamura Suzuko (2000) *The Ainu Language* の3冊が刊行されてはいるが, そのうち Tamura (2000) を本講座の optional text として使用しようと思ったところ, UCSB 側から「入手不可能」という返答を受け取った. 出版元の三省堂に問い合わせて米国での販売代理店を知らせたが, 期間内に間に合わないということで, optional text にするのを断念した. たしかに amazon.com でも同書は扱われておらず, せっかく英文で出版されておりながら海外での入手は困難のようである. 辞書となると, そもそもアイヌ語ー英語辞典として刊行されているのは, 1889年に初版が出され, 1938年の第4版が一般に利用されている John Batchelor, *An Ainu-English-Japanese Dictionary* のみである. 同書は日本では記述の不確実さから「初心者には勧めない」ということになっているが, 日本語が読めない人間にとってはこれ以外に使える辞書は存在しない. しかし出版元は岩波書店であり, これもまた入手困難であろう.

アイヌ語には形態統語論的に見て興味深い現象が多々あり，また系統論的に孤立語として扱われているところからも，言語類型論の研究対象として大きく取り上げられてしかるべき言語でありながら，まずそういった研究書の中で用例にお目にかかることがない．それはそもそも英語文献の少なさに原因があり，その責任はもちろん我々アイヌ語の研究者にある．今回，類型論研究者の数多く集ったこの UCSB で，アイヌ語の音声を聞かせ，文法構造について説明することができたということで，わずかながらその責を果たしたつもりである．

(4)　Daniel Long（東京都立大学）

「日本語の社会言語学」という６週間コースを担当した．

12回分のシラバスは次の通りだった．

(1) 日本の社会言語学の小史と概観（欧米との対照，研究の諸領域）真田信治氏の英文による日本の社会言語学の概要を読んだ．(2) 言語生活研究（国立国語研究所の役割）(3) 言語変化Ⅰ（グロットグラムと言語伝播研究，言語形成期）(4) 言語変化Ⅱ（実時間調査，国立国語研究所の３回の鶴岡調査）(5) 言語変異Ⅰ（新方言，ネオ方言）(6) 言語変異 Ⅱ（外的・内的要因，日本でのラブフ流調査の応用）(7) 言語意識Ⅰ（方言意識，敬語・変異に対す態度・評価）(8) 言語意識Ⅱ（標準語の認識，方言認知地図）(9) ジェンダー（性別と言語使用・言語変化）(10) 敬語（上下・親疎関係，待遇表現，英語のポライトネスとの対照）(11) 言語接触（借用語，バイリンガリズム）(12) 接触言語（日本語が関係した接触言語の概要）．以上のテーマからも分かるように，日本の社会言語学が独自に生んだ概念を紹介するように努めた．

また，授業では，*Shinjuku Boys* というドキュメンタリーに登場するオナベ（男装）バーで働く人の一人称代名詞の使用を分析したクレア・マリィ氏の研究論文を読んだ．授業の時間外に，このビデオ（英語字幕付き）の鑑賞会を行なった．Institute のメーリングリストや張り紙を使い，Institute の参加者全員に呼びかけたが，予想をはるかに越えた50人以上が集まった．

大学院レベルの授業ということもあり，教科書と reader の両方を使うことにした．前者は英語と日本語の両方による解説がついている『社会言語学図集』だった．後者は，私が選んだ７本の英語論文を，大学生協が製本し，販売したものだった．この reader 作成という制度はアメリカの大学でかなり広く導入されているようで，授業のプリントをバラバラで配布するよりも，一冊にまとめるのは優れたアイデアのように思った．

授業に参加した人は大学院生，学部生，大学の先生など様々だった．そして，コンスタントに出席した人，前・後期の片方だけ来た人，一回だけ特定の講義を聞きに来た人，様々な事情があった．朝８時から10時までの早い時間帯だった

にも関わらず，インド，日本，韓国，香港，中国，トルコ，アメリカ，オーストラリア，ニュージーランド，フィンランド，スペインなど幅広い言語圏の人が授業に参加した．講師にとっても非常に充実した6週間だった．

3. 2001年アメリカ言語学会夏期講座日本言語学会奨学生報告

(1) 朝日 祥之（大阪大学大学院）

アメリカ言語学会夏期講座が始まる1週間前まで，フィールドワークに明け暮れる日々が続いていた．調査時期がちょうど大阪の小学校で起きた悲惨な事件と重なったこともあり，若年層インフォーマントへの調査は困難を極め，精神的に疲れきっていた．

しかし，夏期講座が始まると，その疲れもどこかへ消え去ってしまった．社会言語学を専攻する者として，今回の夏期講座は言語学の諸分野の知識を得る理想的な場であったと言える．世界各国から研究者が集まり，著名な言語学者が学生として授業に参加し，議論を交わすといった光景は大変興味深いものであった．また，このような言語学者に対して，授業以外の場で質問や疑問をぶつけ，議論できたのもこの夏期講座の醍醐味の一つだったと思う．

夏期講座では，Roger Andersen 先生の Acquisition and Use of Tense, Mood, and Aspect の授業を履修した．第1，第2言語習得の研究で明らかにされた理論や研究事例を学び，議論する中で，それが方言習得研究にどれだけ応用できるかについて考えを深めることができた．また，当該分野の研究者とフィールドワークで収集した談話データをもとに議論できたのも有益だった．

このほかに，Daniel Long 先生の Japanese Sociolinguistics の授業も有益だった．日本の社会言語学が世界に紹介される場として，大変意義深いものであったと思う．同じ社会言語学を専門とする者として，復習の場にもなったと同時に，当該分野が明らかにしてきた事象の多さ，そして，欧米を中心とした社会言語学への貢献度の高さを改めて認識した．

アメリカ言語学会夏期講座は6週間のコースであったのだが，実際終えてみると，それが短く感じられたというのが正直な感想である．これからも，このような夏期講座に積極的に参加し，自分を高めていきたい．

(2) 片岡喜代子（京都大学研究生）

今回の LSA 夏期講座に日本言語学会奨学生として参加させていただき，充実した6週間を過ごしてきました．

自然環境言うこと無し，言語学各分野一流の研究者の講義が山盛り，研究者や学生本位に作られたキャンパス，これ以上望めない程の環境で，でもどれだけの収穫を得ることができるか少し不安を抱えたスタートでした．

クラスや各週末に開かれる学会，ワークショップ等，内容は実に盛り沢山，各方面第一線で活躍の研究者の講義ばかりで，どれを選ぶか迷って困ったほどでした．講座がスタートしてみると，不安どころかすべてが興味深く，頭と身体が一つしかないのが恨めしく思われたほどです．

今回はアジア・大平洋地域の諸言語についての研究という講座自体の大きなテーマがあり，日本語を材料に統語論を研究している私にはとても有意義でした．聴講したクラスは，日本から参加の田窪先生，金水先生のクラス，韓国の Chung-min Lee 先生のクラス等ですが，ある課題に短期間に集中して取り組み考察を深めて行くことで非常に有益なものになりました．

またクラス等で知り合った各国からの友人との議論や情報交換を通じて，研究心への刺激を数多く受けました．ひとことに「言語の研究」と言っても，この世界には実に多くの人が様々なことに興味を見い出して，試行錯誤しながら自分の研究を続けていることを改めて認識しました．考え方を柔軟に多様な見方をし，その上で真理は何かを探るというごく当たり前のことがどんなに大切であるか，研究の初期段階においてこのような機会に恵まれたことに感謝致します．この経験が今後の研究の基盤づくりになるものと信じております．

最後になりましたが，奨学生として資金援助してくださった日本言語学会会員の皆様に心から御礼を申し上げます．帰国後程なくして一連のテロ事件が起きました．国の違いや人種の違いを越えて「研究」という共通点だけで結ばれる今回の夏期講座のような場が続くよう平和的解決を願って止みません．

(3)　Anne-Marie Hartenstein（神戸大学大学院）

アメリカ言語学会夏期講座の内容の豊富さは言語学者の間で有名です．この講座は私にとって重要なものでした．この夏期講座で今まで全く知らなかったものをたくさん勉強させていただけたこと，心から感謝します．次の点が今回新しくえた情報です．Sandra Thompson という言語学者の授業に参加し，Grammar and Interaction の分野について初めて学びました．文法の研究は言語学者の作った文を研究するだけではなく，人の談話を聞きながら今までに学んだ文法構造が本当にあるかどうか確かめるのが一番大切だということです．

Conversational Analysis の基本の考え方を取り，言語学の中でこの文法構造を使った人はどんな目的だったであろうかということ，例えば，まず他動性の概念を考えます．今までの研究は他動性以外の研究をあまり中心としてきませんでしたが，実際の発話行為に注目しますと，会話の中では自動詞の文の使用が一番多く見られます．それにも関わらず，なぜ今まで他動詞の文だけを中心にしてきたのか，ということなのです．また，頻度（frequency）の問題なども考えられます．言語学的研究を行うとき頻度（frequency）の問題についても考えたほう

がいいということを学びました.

Goldberg や Shibatani, Dixon, Hopper, Kemmer などという言語学者の授業も私自身の研究においてたいへん参考になりました.

授業以外，講演会などにも参加しまして，他の言語学者の方の研究についても聞く機会を得ました．たいへんいい経験になりました．また，まだ出版されていない論文を読む機会ももつことができ，知識が広がったと思います.

単位としては取っていない授業にもたくさん参加させていただきいい勉強になりました．現在取り組んでいる修士論文のためにもこの夏期講座はたいへん得るものが多い場となりました．先生方から得られた研究に対する考え方，そして，様々な国から参加していた受講者の方々とも交流することができた，この講座は，私にとって本当に魅力的な時間でした.

この夏期講座を通じて，言語学の探究心を深める機会をもつことができました．皆様がこのような機会を私にあたえてくださいましたことを心から感謝します.

学会事務局からのお知らせ（学生会員について）

平成13年11月17日に開かれた平成13年度第２回委員会において，平成14年度より，新たに，学生会員というカテゴリーを設けることが決定されました．これは，若手研究者を積極的に育て，支援することを目的としたものです.

学生会員は，機関誌『言語研究』の無料受け取り，大会の案内，大会発表など，通常権利はすべて有しますが，次の二点が通常会員の場合と異なります.

1）年会費を4,000円（在外会員は5,500円）とする.
2）選挙権，及び被選挙権を持たない.

この学生会員のカテゴリーは，現在学生の人で通常会員になっている人，及び新規に入会される方のいずれにも適用されます．学生会員として登録を希望される方は，毎年４月30日までに，新年度有効の学生証のコピー，在学証明書など，学生の身分を証明するものを，日本言語学会事務局まで，ファックスあるいは通常郵便でお送りください.

なお，平成13年度より，銀行の自動振り込みによる会費納入が可能となっていますので，ご希望の方は，学会事務局までお問い合わせください.

〔別表1〕 平成12年度　日本言語学会決算

自　平成12年4月　至　平成13年3月　　（単位　円）

収入		支出	
科目	金額	科目	金額
会費	13,682,500	刊行費	4,819,395
雑誌売上	1,137,700	発送費	337,420
文部省補助金	1,200,000	編集費	605,377
預金金利	14,552	事務委託費	3,989,160
大会関係収入	1,450,500	大会関係費	2,710,047
雑収入	61,630	委員会費	197,500
夏期講座収入	749,746	常任委員会費	495,900
		大会運営委員会費	533,989
		危機言語小委員会	76,259
		夏期講座検討小委員会費	146,289
		Pacific Rim Institute 検討小委員会費	0
		ＣＩＰＬ負担金	100,000
		危機言語シンポジウム費	223,384
		通信費	561,989
		事務局費	767,254
		消耗品費	336,957
		ホームページ作成費	210,000
		雑費	80,304
		夏期講座経費	1,550,000
		〈積立金〉	
		選挙積立金	300,000
		名簿作成積立金	700,000
		夏期講座積立金	400,000
		国際関係積立金	500,000
		危機言語プロジェクト積立金	200,000
		記念大会積立金	400,000
収入合計	18,296,628	支出合計	20,241,224
前期繰越	4,047,455	次期繰越金	2,102,859
計	22,344,083	計	22,344,083

「夏期講座関係」

収入		支出	
科目	金額	科目	金額
夏期講座収入	8,644,560	夏期講座支出	9,444,814
言語学会事務局から入金	1,550,000	言語学会事務局へ送金	749,746
収入合計	10,194,560	支出合計	10,194,560

◇収入内訳(単位　円)

会費

国内個人会員会費	12,179,000
国内団体会員会費	941,500
国内維持会員会費	110,000
在外個人会員会費	426,500
在外団体会員会費	25,500
合　計	13,682,500

雑誌売上

三省堂書店	126,000
松香堂書店（取り次ぎ業務委託）	472,450
丸　善	258,300
その他書店	63,000
バックナンバー売上	217,950
合　計	1,137,700

文部省補助金　1,200,000

預金金利　14,552

大会関係収入

120回大会出店料	70,000
121回大会出店料	60,000
111回～119回大会予稿集売上	43,000
120回大会予稿集売上	729,500
121回大会予稿集売上	548,000
合　計	1,450,500

雑収入

116号抜刷増刷代	12,820
117号抜刷増刷代	11,080
換金手数料	2,000
広告料	30,000
予稿集コピーサービス	5,730
合 計	61,630

*換金手数料は，在外会員からの小切手換金料としての収入

夏期講座会計より　749,746　*夏期講座会計より事務局へ

◇支出内訳（単位　円）

刊行費

内訳	118号（198p.）	119号（192p.）	計（390p.）
印刷費	2,411,640	2,338,560	4,750,200
抜刷代	40,740	28,455	69,195
合 計	2,452,380	2,367,015	4,819,395

*割付・校正料は印刷費に含む

発送費　337,420

『言語研究』発送料（三省堂への送付料も含む・追加発送料は含まない）

編集費

通信費	39,990
アルバイト代	108,500
旅費	404,000
会議費	41,831
文具費	11,056
合 計	605,377

事務委託費　3,989,160

2000年4月分～2001年3月分

日本言語学会と中西印刷株式会社により交わされた事務委託内容の覚書に基づく業務の代金

大会関係費

	第120回	第121回	計
プログラム印刷費	136,500	136,500	273,000
ポスター印刷費	—	73,500	73,500
出欠葉書印刷費	22,050	22,050	44,100
プログラム発送費	187,770	196,710	384,480
大　会　費	382,323	391,994	774,317
予稿集印刷	533,400	467,250	1,000,650
	(650部発行)	(600部発行)	
講師謝金	50,000	110,000	160,000
合　計	1,312,043	1,398,004	2,710,047

委員会費

通信費	14,440
会議費	183,060
合　計	197,500

常任委員会費

通信費	0
旅　費	461,190
会議費	34,710
合　計	495,900

大会運営委員会費

旅　費	419,500
会議費	104,489
アルバイト代	10,000
合　計	533,989

危機言語小委員会費

通信費	1,440
会議費	15,819
旅費	59,000
合　計	76,259

夏期講座検討小委員会費

通信費	0
旅　費	113,540
会議費	32,749
合　計	146,289

Pacific Rim Institute 検討小委員会費

通信費	0
旅　費	0
会議費	0
合　計	0

ＣＩＰＬ負担金　100,000

危機言語シンポジウム費

会議費	194,685
アルバイト代	26,957
その他（カメラ・現像代）	1,742
合　計	223,384

通信費	
切手購入費	112,390
国際ＦＡＸ料金・銀行ＦＡＸ料金	16,247
会費請求・督促状送付，広告料請求書送付	181,170
小切手換金手数料・カード手数料・送金手数料	30,550
『言語研究』追加・抜刷・バックナンバー発送費	53,845
発表採否通知・司会者依頼状等大会関係送料	131,507
その他（文部省提出書類発送等）	36,280
合　　計	561,989

事務局費	
通信費	3,810
消耗品費	436
旅　費	283,008
事務局長費・事務局長補佐経費	480,000
合　　計	767,254

消耗品費	
文具費（ファイル・ゴム印等）	8,307
封筒・振替用紙（印刷費含む）	279,300
案内・規定等（印刷費含む）	49,350
合　　計	336,957

ホームページ作成費	210,000

雑費	
三根谷先生告別式供花代、弔電代	19,204
会費自動引落準備費	61,100
合　計	80,304

夏期講座積立金	1,550,000	
	*事務局より夏期講座会計へ	
選挙積立金	300,000	(定期Bへ)
名簿作成費積立金	700,000	(定期Bへ)
夏期講座積立金	400,000	(定期Bへ)
国際関係積立金	500,000	(定期Bへ)
危機言語プロジェクト積立金	200,000	(定期Bへ)
記念大会積立金	400,000	(定期Bへ)

日本言語学会
平成12年度予算・実績対照表
収入　　（単位　円）

科　目	予　算	実　績	対予算差異
会　費	13,500,000	13,682,500	182,500
雑誌売上	1,500,000	1,137,700	△ 362,300
文部省補助金	1,200,000	1,200,000	0
預金金利	20,000	14,552	△ 5,448
大会関係収入	1,500,000	1,450,500	△ 49,500
雑収入	50,000	61,630	11,630
夏期講座収入	0	749,746	749,746
収入合計	17,770,000	18,296,628	526,628
前期繰越	4,047,455	4,047,455	0
合　計	21,817,455	22,344,083	526,628

△＝実績－予算

支出 (単位 円)

科目	予算	実績	対予算差異
刊行費	5,500,000	4,819,395	680,605
発送費	450,000	337,420	112,580
編集費	600,000	605,377	△ 5,377
事務委託費	3,990,000	3,989,160	840
大会関係費	3,100,000	2,710,047	389,953
委員会費	200,000	197,500	2,500
常任委員会費	600,000	495,900	104,100
大会運営委員会費	600,000	533,989	66,011
危機言語小委員会費	150,000	76,259	73,741
夏期講座検討小委員会費	150,000	146,289	3,711
Pacific Rim Institute 検討小委員会費	150,000	0	150,000
CIPL負担金	100,000	100,000	0
危機言語シンポジウム費	500,000	223,384	276,616
通信費	350,000	561,989	△ 211,989
事務局費	600,000	767,254	△ 167,254
消耗品費	300,000	336,957	△ 36,957
ホームページ作成費	300,000	210,000	90,000
雑費	27,455	80,304	△ 52,849
夏期講座経費	1,550,000	1,550,000	0
予備費	100,000	0	100,000
選挙積立金	300,000	300,000	0
名簿作成積立金	700,000	700,000	0
夏期講座積立金	400,000	400,000	0
国際関係積立金	500,000	500,000	0
危機言語プロジェクト積立金	200,000	200,000	0
記念大会積立金	400,000	400,000	0
支出合計	21,817,455	20,241,224	1,576,231
次期繰越		2,102,859	2,102,859
合計	21,817,455	22,344,083	△526,628

△＝予算－実績

資産勘定　　（単位　円）

借　方	金　額	貸　方	金　額
本部事務局	(19,457,859)	前受会費	(266,600)
現金	165,121	国内個人	218,600
第一勧業銀行　普通	2,116,603	国内団体	7,000
定期A	4,000,000	在外個人	41,000
定期B	11,200,000	在外団体	0
郵便振替貯金	1,959,135	積立金繰入	11,200,000
カード	17,000	未払金	5,997,225
事務局	(108,825)	次期繰越	2,102,859
事務局口座	818		
常任委員会口座	104,296		
夏期講座検討小委員会口座	3,711		
計	19,566,684	計	19,566,684

*未払金は，当該年度内に支払われるべき費用が支払われなかった場合の科目
*平成12年度決算の未払金は『言語研究』第118，119号の印刷代，抜刷印刷代，第119号発送代，事務委託費2・3月分，第121回大会プログラム・懇親会葉書，他封筒など消耗品費

第一勧業銀行　定期B

（単位　円）

平成12年度選挙積立金	300,000
平成12年度名簿作成積立金	700,000
平成12年度夏期講座積立金	400,000
平成12年度国際関係積立金	500,000
平成12年度危機言語プロジェクト積立金	200,000
平成12年度記念大会積立金	400,000
平成11年度積立金	2,550,000
平成10年度積立金	1,750,000
平成9年度積立金	2,200,000
平成8年度積立金	2,200,000
合　計	11,200,000

〔別表2〕 平成13年度 日本言語学会予算

自 平成13年4月 至 平成14年3月 (単位 円)

収入		支出	
科目	金額	科目	金額
会費	13,600,000	〈一般会計〉	
雑誌売上	1,200,000	刊行費	5,000,000
文部省補助金	1,500,000	発送費	450,000
預金金利	15,000	編集費	600,000
大会関係収入	1,500,000	事務委託費	4,284,000
雑収入	50,000	大会関係費	2,800,000
積み立てからの繰越金	3,350,000	委員会費	200,000
		常任委員会費	600,000
		大会運営委員会費	700,000
		危機言語小委員会費	200,000
		夏期講座検討小委員会費	250,000
		Pacific Rim Institute 検討小委員会費	150,000
		学会ホームページ作成費	300,000
		ＣＩＰＬ負担金	100,000
		危機言語シンポジウム費	300,000
		Pacific Rim Institute 派遣旅費	3,350,000
		通信費	500,000
		事務局費	800,000
		消耗品費	300,000
		予備費	100,000
		雑費	133,859
		〈積立金〉	
		選挙積立金	300,000
		名簿作成積立金	700,000
		夏期講座積立金	400,000
		危機言語プロジェクト積立金	400,000
		記念大会積立金	400,000
収入合計	21,215,000	危機言語プロジェクト積立金	400,000
前期繰越金	2,102,859	記念大会積立金	400,000
計	23,317,859	計	23,317,859

第122回大会

期　日　　2001年6月23日（土）～24日（日）
会　場　　一橋大学

第1日（6月23日）

公開シンポジウム・総会　午後1時30分～6時20分

開会の辞	会　長
開催校挨拶	石　弘光
シンポジウム　言語学の諸相―世紀を越えて	
「言語理論の形式化と計算の理論」	辻井　潤一
「変容する方言と言語研究」	木部　暢子
「Historical Linguistics in the 21st Century : Trends and Traditions」	Brent Vine
「理論言語学―その研究と教育」	三原　健一
「言語の危機と21世紀言語学の課題」	津曲　敏郎
「日本語学の解体と再生」	野田　尚史

全体討論
会員総会

第2日（6月24日）

研究発表　午前10時～午後3時50分

◦A 会 場

	司会	井上　優	
(A 1)	10:00～	日本語の評価的文副詞「も」の機能について	西川真理子
(A 2)	10:30～	命題否定表現と共起する「ばかり」について	森　　貞
(A 3)	11:00～	属性の階層性とテイル構文―事象叙述から属性叙述へ―	澤田　浩子
	司会	坂本　　勉	
(A 4)	1:00～	物事の隣接とカテゴリーの包摂―静的関係を表す理由文―	渡邊　良子
(A 5)	1:30～	多義語の意味に関わる二つのネットワーク構造―“心理的プロトタイプ”度の高さを位置付ける―	鈴木　智美

司会 堀川 智也

(A 6)	2:20～	「まったり」にみる味覚語の比喩拡張	飯田 朝子
(A 7)	2:50～	皮肉について	鈴木 髙志
(A 8)	3:20～	メタフォリカルな<場所>への指示	秋月高太郎

◦B 会 場

司会 前田 広幸

(B 1)	10:00～	認識動詞構文について—「(Xガ) AヲBダト思ウ」と「(Xガ) AガBダト思ウ」—	阿部 二郎
(B 2)	10:30～	断片文としての後置要素	加藤 鉱三
(B 3)	11:00～	数量詞の解釈とリニアオーダー—参照点構造の観点から—	尾谷 昌則

司会 長谷川 宏

(B 4)	1:00～	日本語の受動文における義務的動作主句と随意的動作主句	田中 裕司
(B 5)	1:30～	極小理論における主語移動の意味	小林亜希子

司会 上山 あゆみ

(B 6)	2:00～	Superiority, Crossing / Nesting and Feature Assignment	藤森 千博
(B 7)	2:50～	*Wh*-in-situ in Spec-CP : A Comparative Study	本田 謙介
(B 8)	3:20～	一致をもたない言語の格体系—日本語の場合—	林 龍次郎

◦C 会 場

司会 井上 史雄

(C 1)	10:00～	タイ語と日本語における一人称呼称の対照・社会言語学的考察	野中 由美
(C 2)	10:30～	親疎関係とコードスイッチング—台湾におけるバイリンガリズムの場合—	陳 麗君
(C 3)	11:00～	中国語の依頼表現の選択条件—敬語表現の視点から—	盧 万才

司会 熊本 裕

(C 4)	1:00～	接語化・屈折・語形成—北ゲルマン語の後置定冠詞を中心に—	清水 誠

(C 5)	1:30～	印欧語における最上級接尾辞と序数詞の関係について	西村　周浩
	司会	米山　三明	
(C 6)	2:20～	形容詞的名詞と表示のモジュール性	朝賀　俊彦
(C 7)	2:50～	形態素 -ish の多義構造	清水　啓子
(C 8)	3:20～	法助動詞 CAN と接続する述語との意味関係について	高橋　真弓

◦D 会 場

	司会	窪園　晴夫	
(D 1)	10:00～	現代日本語における与益構文と受益構文の非対称性—与益者・受益者の表現をめぐって—	竹林　一志
(D 2)	10:30～	母音無声化の生起について	洪　心恰
(D 3)	11:00～	韻律階層と韻律境界	時崎　久夫
	司会	早津　恵美子	
(D 4)	1:00～	スンバワ語の否定表現	塩原　朝子
(D 5)	1:30～	バンティック語のヴォイスとフォーカス	内海　敦子
	司会	鷲尾　龍一	
(D 6)	2:20～	「与格」「対格」「移動格」と 'Transitivity' —日本語，インドネシア語対照に基づく自／他動詞再考—	湯浅　章子
(D 7)	2:50～	ビルマ語の使役表現	安田　哲
(D 8)	3:20～	イテリメン語の使役について	小野智香子

◦E 会 場

	司会	坂原　茂	
(E 1)	10:00～	満州語文語における「見る」と「知る」	山崎　雅人
(E 2)	10:30～	中国語のロバ文	伊藤さとみ
(E 3)	11:00～	琉球方言動詞の「終止形」をめぐる問題点—八重山（石垣・宮良）方言動詞の－N と話し手—	伊豆山敦子
	司会	平野　日出征	
(E 4)	1:00～	朝鮮語延辺地区龍井方言のアクセント体系	車　香春

(E 5)	1:30〜	朝鮮語ソウル方言における音節構造のプロソディーへの影響—文中の場合—	宇都木 昭
	司会	横谷 輝男	
(E 6)	2:20〜	ロシア語イントネーションの音韻論的記述	五十嵐陽介
(E 7)	2:50〜	チャクマ語のアクセントに関する通時的考察	藤原 敬介
(E 8)	3:20〜	方言比較による複合名詞アクセント規制の獲得過程の検討	白勢 彩子 筧 一彦 桐谷 滋

◇ 退 会

国内個人会員 91名
在外個人会員 1名
国内団体会員 3件

◇ 本誌は，文部省平成13年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を得て刊行されたものである．